

## 「人を自由に放つこと、揺さぶること」を作家に問うソントグ

話すことと書くことは当然異なる。そう話すこととそう書くこととがどう異なるのか、について考えると、そう書くことは自分の考えを表明すること以上ではない。読者はそのことを本を開いて知ることになるだろう。だが話すことはそうではない。まずどこで話したかという場所と、いつ話したかという時間がつねに絡んでくるし、ソントグの記念講演についていえば、そのように話したという事実が聴衆のなかで浮き彫りにされてくる。つまり、そう書いたことは活字化されるなかで何度も上書きされて変更されていくが、話をしたほうは後で変更したくても、そう話したことは変更できない。そのときの話を聞いた者の中にずっと留めおかれるからだ。その意味では、公衆を前に話すことは宣言文的な意味あいをつねに帯びているといえよう。

ソントグがイスラエルの地でそう話すことは、彼女になにかを付け加えずにはおかなくなる。その「なにか」が、彼女を存在する人へと向かわせることになるのかどうかはわからない。彼女が存在する人へと移行するためには、そう話すことじたいが問題となり、そこが問題の現場とならねばならない。いいかえると、話す人が存在する人へと変わるためには、話している場所が問題を占拠することによって「存在すること」を要請されなくてはならない。もちろん、その要請は話している場所にとどまることなく、「次を」たえまなく用意している。では、話すことから存在することへと変わることによって、一体、なにがどうなるのか。存在することによって、「私は、他者との能動的な連帯を信じる人間としてある」と、ソントグは言う。具体的で生き活きとした人間同士の連帯を感じることができる、と言い換えてもよいだろう。

書くことは当然ながら、話すこともまた、作家を「他者との能動的な連帯を信じる人間」にすることはできない。存在することによってしか、「他者との能動的な連帯を信じる」ことはできない。具体的な問題の中に存在することによってしか、具体的な問題をかかえこんで生活している人々と共に存在することはできないからだ。いうまでもなく作家もまた、作家ではないところで存在している。作家にとって作家ではないところが主戦場ではないのは、作家にとっての主戦場は書くことであるからだ。つまり、書かないところでは作家たりえないと考えられている。

しかし、作家であることは作家ではないところでも、書かないところでも、作家であることを要請されていないだろうか。作家であることは職業でもなければ、趣味や道楽でもなく、一つの存在の仕方として考えるならば、そうではないだろうか。そう考えるならば、作家であることは作家ではないとされるところでも、書くことに適した書齋のような環境ではないところでも、いや、そういうところでこそ、書かなくてはならないのではないだろうか。作家とみなされる領域から遠く隔たっているところでこそ、作家としてどのように書くことができるか、が問われてくるのではないだろうか。そのようにして、作家が作家として通用するところで存在するのは異なるかたちで、作家として存在することができるようになるのではないだろうか。

存在することはもちろん、そのことにおいて行動することであるが、「義憤にかられた行動」を前にしてソントグは、「だが、行動する人、それは作家だろうか」と問う。作家が書く人であり、「書く人は存在する人ではない」ならば、作家は行動する人ではないし、行動する人は作家ではないということになる。作家が行動するとき、彼は作家以外の者として行動していることになるだろう。しかし、先に述べたように、作家として通用しないところでも作家としての存在の仕方において書こうとするなら、その書くことは紛れもなく行動として突きだされていく。その行動においてはもはや作家という規定じたいが越えられており、彼は「ただ一人の人間」として書き、存在し、行動していくことになるだろう。

そうなると、もはや「書くこと」は紙の上での行為に限定されない。行動もまた「書くこと」にほかならなくなってくる。そう考えれば、紙の上での行為にへばりつく作家のイメージから解放されて、作家であることは紙の上にも書くし、紙の上以外にも、そして、書くことができるあらゆるところに書かなくてはならないだろう。とりわけ、書いてはならないとされる禁忌の空間でこそ、「書くこと」

が最も要請されてくるにちがいない。「義憤にかられた行動というものを私は信じている」というソングからすれば、おそらく作家であろうとなかろうと、行動せざるをえないときは行動すればよい、ということであろうが、そのとき、行動している誰もがこれから新たにつくりだされようとしている「何か」に向かう「作家」として行動しているとみなされるのである。

「広い意味の文学」という言いかたがなされることがある。書くことを使命とする作家が行動することになったとしても、それは作家にとっての書くことの領域が拡大されていくことになったということであるだろう。作家もまた書くだけでなく、さまざまな方法を通じて社会にむけて発信していく必要があるという考えかたについていえば、書くことが作家に対してそのように要請せざるをえなくなったということであり、書くことが従来の書くことの枠組みからの逸脱を願っているとすれば、「広い意味の文学」とは「逸脱」にこそ文学にとっての根本的な課題を見出そうとしているのかもしれない。

いま何をいおうとしているのかといえば、逸脱していく文学について語りながら、表現について思いをめぐらしているのである。「逸脱」に文学を見出していこうとするなら、文学から「逸脱」していく過程を「表現」と捉えることがもっとも適切な気がする。作家は書くことの領域において表現者であるということは、書くことの領域が全領域にまで跨れば、その全領域で書くことにおいて作家は作家であることに限定されずに、どこでも、いつでも表現者であることにおいて作家でありつづけるだろう。

文学は「何が起きていようと、つねに、それ以外にも起きていることがある、という認識を助けることだ」と語るソングは、「何事であれ、そこにはつねに、それ以上のことがある。どんな出来事でも、他にも出来事がある」と文学へのまなざしの逸脱を示唆して、「文学は『これもまた』とか『他にも』といった別の存在に気づかせる仕事だ。実際、つねに、また別のことが起こっているからだ」と繰り返し、「作家がすべきことは、人を自由に放つこと、揺さぶることだ。共感と新しい関心事へと向かって道を開くことだ。もしかしたら、そう、もしかしたらでかまわない、いまとは違うもの、より良いものになれるかもしれないと、希望をもたせること。人は変われる、と気づかせることだ」と強調する。彼女の口調からは文学が取り組むべき本当の課題は文学以外のことにあり、それ故にすべてのことがらのなかに文学が含まれているし、文学でないものはどこにもない、という意味が響いてくる。

先に触れてきたが、別のいいかたをすると、いま自分に起きていることだけが重要なのではなく、「それ以外にも起きていること」も重要である、ということだ。「それ以外」の重要性に気づかなければ、いま自分に起きていることの重要性にも気づかないだろう。さらに別のいいかたをすると、いま自分に起きていることに閉ざされて盲目になるな、ということでもある。いま自分に起きていることは、「それ以外にも起きていること」へのまなざしから照射されることによって、問題解決の途が切り拓かれてくるにちがいない。いま自分に起きていることと「それ以外にも起きていること」とはつながっており、その結節点をいかに追求するかであり、「どんな出来事」も他の出来事とのつながりのなかでしか起こってこないのである。

さて、いまは亡きソングにむかっても、問うておかなくてはならない。パレスチナ問題をめぐる状況のなかで、「人を自由に放つこと、揺さぶること」はいかにして可能か。イスラエル人、パレスチナ人共に、どのように「共感と新しい関心事へと向かって道を開くこと」ができるか。「いまとは違うもの、より良いものになれるかもしれないと、希望をもたせること。人は変われる、と気づかせること」の「もしかしたら」をどのようにつくりだせるか。

その深刻で大事な問いをエルサレム賞受賞の記念講演でソングは、すでに作家である者たちにむかって、これから作家であろうとする者たちにむかって、そしてあらゆる局面で「人を自由に放つこと、揺さぶること」を心がけている、自分をけって作家とはみなしていない作家的な生きかたを試行している人々にむかって、投げかけているのである。もっと精力的に、意欲的に、かぎりない情熱を傾けて、「いまとは違うもの、より良いものになれるかもしれないと、希望をもたせること。人は変われる、と気づかせ」ようではないか、と呼びかけているのだ。それにしても我々はあまりにも非力すぎることを激しく痛感しながら。

